

令和 4 年 6 月 5 日現在

機関番号：24402

研究種目：挑戦的研究（萌芽）

研究期間：2018～2021

課題番号：18K18488

研究課題名（和文）サウンドアート学確立による20世紀アート史の書き換え

研究課題名（英文）Rewriting 20th Century Art History by Establishing Sound Art Studies

研究代表者

中川 眞（Nakagawa, Shin）

大阪市立大学・都市研究プラザ・特任教授

研究者番号：40135637

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 4,000,000円

研究成果の概要（和文）：サウンドアートという1970年代から顕著に現れてきた現代アートを理解するために2つの作業を重点的に行なった。第1は、アーティストの全作業の記録のアーカイブ化（データベース化）、第2は、日本におけるサウンドアートの通史の作成作業である。アーカイブ化の対象となったのは我が国におけるサウンドアートの草分けといえる鈴木昭男（1941年生）の営為であり、1006項目のデータベースができあがった。通史研究としては、音楽ではない音への意識が出現してくる歴史と音楽が美術として受容されていく歴史というふたつの歴史が重複し交錯する歴史として叙述した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

サウンドアート学を確立させるための基礎資料（データベース）を構築したことと、これまで為されていなかった日本のサウンドアートの通史の叙述を試みたことが学術的意義である。様々な領域と交差するサウンドアートは、難解な現代アートの領域の中で、比較的親しみやすい性質をもっている。しかしこれまで本格的に紹介された研究は数えるほどしかなく、本研究はそこに大きな蓄積を加え、広く研究者や愛好家に応えるものとなった。また本研究をもとに研究分担者は単行本の刊行準備をしており、本研究の社会的意義をさらに高めるものとなる。

研究成果の概要（英文）：In order to understand sound art, a contemporary art form that has emerged prominently since the 1970s, two major tasks were undertaken. The first was making an archive (database) of the artists' work, and the second was the describing a comprehensive history of sound art in Japan. The archiving of the work of Akio Suzuki (b. 1941), a pioneer of sound art in Japan, resulted in a database of 1006 items. The history of sound art is described as a history of overlapping and intersecting two histories: "the history of the emergence of an awareness of sound that is not music," and "the history of the acceptance of music as visual art."

研究分野：サウンドアート

キーワード：サウンドアート 鈴木昭男 王福瑞 データベース アーカイブ

## 1. 研究開始当初の背景

1970年代のサウンドアートのなかで、ニューハウスの‘Times Square’ (1977) は画期的なインスタレーションであった。以後、環境と深いかかわりをもつサウンドアートが続出する。日本では鈴木昭男が、また米国において塩見允枝子、小杉武久、刀根康尚らが活動を始めたが、それらに関する記述はカタログなどが先行し、研究寄りでは Réne van Peer “Interviews with Sounds Artists” (1993) が嚆矢となった。音響聴取・再生と技術史の相互作用を論じた J. Sterne “The Audible Past: Cultural Origins of Sound Reproduction” (2003、翻訳 2015 は研究分担者の中川克志による) によって音響文化史的方法論が提示されたが、長スパンの歴史的展望からの記述が中心で、70年代以降のサウンドアートへの応用は中川克志がようやく近年開始したところである。

研究代表者(中川眞)は1980年代初期にサウンドアートと出会い、対象の重要性を直感してすぐに研究に着手した。インタビュー手法を通して文脈分析を中心に行い、対象はドイツのユリウス、クービッシュ、フランスのサマク、オランダのヘス、パンハウゼン、ベルギーのフォックス、英のイーストレイ、トゥープ、米のフォンタナ、ニューハウス、日本の鈴木、藤本など、欧米日を中心に約30名の活動に及んだ。その成果として『サウンドアートのトポス』(2007)を公刊した。そこで指摘した問題群である「音響」「知覚」「環境」「身体性」が、本申請における研究の出発点となっている。

本研究では欧米日をカバーする中川眞、日本とアジアをカバーする中川克志の連携によって、日本のサウンドアートを世界から俯瞰的に捉える体制ができあがった。さらにサウンドアートの展示の経験豊かな美術館学芸員である奥村一郎が研究協力者として加わって、サウンドアート研究のコミュニティが我が国で初めて誕生することとなった。

## 2. 研究の目的

本研究は、サウンドアートを学的対象として位置づけ(サウンドアート学の確立)

日本のサウンドアートの独自性を解明し、アーティストの手元に散在している諸資料・作品のデータベース化すること、以上の3点を目的とする。

本研究の対象であるサウンドアートは1970年代に欧米日に出現したもので、その多くは音楽と美術の交差領域に位置している。造形作品のなかに音響を潜ませるもの、音響オブジェが造形的であるもの、純粹に新たな音響を開発するものなど多様な表現形式があり、アカデミックな芸術教育のなかからは生まれ出ない作品・パフォーマンスが中心である。音響評論家(佐々木敦、秋田昌美、Réne van Peer、Alan Lichtら)やマニアックなノイズ愛好家などコアな人々による作品需要(あるいは受容)の広さ、深さに比して、学術的応答は貧弱な状態にとどまっており、サウンドアートを学的な対象として位置づけるための方法論や対象の確定など、サウンドアート学確立のための学術的基盤の形成が急務である。これまでサウンドアートに学術的アプローチが及ばなかったのは、アートのマイナーなジャンルだからではなく、極端に多様な表現方法が個人ベースで広がっているため、厳密な分析手法の確立に大きな困難が想定されたからでもある。

本科研では、世界のなかでも際立ってユニークな日本のサウンドアートを取り上げ、日本におけるサウンドアートの独自性を解明することから出発することとした。その際には、主として現存のアーティストと交渉をし、本人が所持する資料や情報を収集し

データベース化して研究の基礎資料とする作業を重視した。また、主たるターゲットは日本のサウンドアートではあるが、サウンドアートは世界各地に広がっており、本研究も世界の中における日本のサウンドアートという視点をもたねばならない。その観点から、当面の比較の視座としてアジア(台湾など)のサウンドアートを同時に調査することとした。

### 3. 研究の方法

研究体制は2名の研究者と1名の学芸員(協力者)からなる。中川眞(代表者)はサウンドアートの学的対象としての位置づけに注力しながら全体の統括を行った。中川克志(分担者)は主として日本のサウンドアートの独自性の解明とアジアのサウンドアートの調査を担った。中川と奥村一郎(協力者・和歌山県立近代美術館)がアーティストの手元に散在している諸資料・作品のデータベース化を実施した。研究工程的にはの時系列となっている。

1年目(H30)には、これまで系統だって収集されてこなかった作品・パフォーマンス情報(創作メモ・スケッチ、カタログ、広報資料、批評、雑誌・新聞記事、記録映像、音響資料・音源、インタビュー記録など)を作家別に網羅的に集め、整理(データベース化)することから始めた。対象作家としてサウンドアート第一世代の鈴木昭男に焦点を当てた。本工程は1年目で終了する予定であったが、鈴木本人が所持する材料が膨大にあり、本研究期間中にはデータベース化が終了しなかった。1年目後半(2018年08月04日~10月21日)には、本研究による成果を参照しながら、協力者の奥村が企画して和歌山県立近代美術館にて鈴木昭男展を開き、成果公表の一端とした。2年目以降には、整理のできた資料データベースをもとに、日本のサウンドアートの独自性の解明を始め、その成果を研究ノートあるいは論文という形で学会誌等に公表した。

中川眞は、奥村とともに鈴木昭男資料のデータベース化のフォーマットを考案し、研究補佐の助けを得ながら1000点以上の資料をデータベース化した。美学・芸術学的な観点からサウンドアートの価値を論ずる一方、SEA(ソーシャリー・エンゲイジドアート)の観点から鈴木昭男の芸術営為と社会環境の関係性に関する解読を試みた。

中川克志は、日本の現代美術におけるサウンドアートの受容史を整理するために、雑誌『美術手帖』を中心とする言説調査を行い、20世紀後半の日本におけるサウンド・アートの概観を整理した。また、台湾の状況を調査するために、台湾におけるサウンド・アートの第一人者王福瑞(ワン・フーレイ, WANG Fujui)を始めとする複数のアーティスト - 王虹凱(ワン・ホンカイ, WANG Hong-kai)、Nigel Brown, Yanick Dauby, 張惠笙(アリス・チャン, Alice Hui-Sheng Chang)など - にインタビュー調査を行った

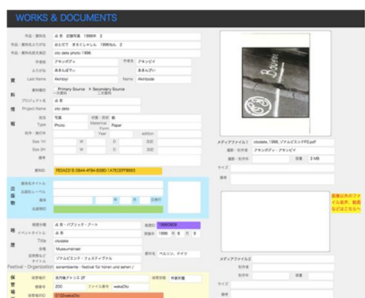
### 4. 研究成果

本研究の成果として主に2点挙げることができる。第1は、鈴木昭男のアート活動に関わるデータベースの作成、第2は、日本におけるサウンドアートの通史を提示したことである。

データベース作成は主に中川眞と奥村が担った。その目的は鈴木昭男の全作品、営為、鈴木にまつわる言説、広報媒体、映像、報道、考察などを網羅することである。サウンドアーティストのアーカイブは既に小杉武久のものが知られているが、鈴木のアーカイブはこれに継ぐものである。アーカイブは研究資料として極めて貴重であり、さらに他

のアーティストのアーカイブが出揃うことによってサウンドアート学は確立されるであろう。

データベースに登録したデータ数は 1006 件であり、内訳は次の通りである。フライヤー531 件、プログラム 153 件、パンフレット 82 件、新聞/雑誌/ニュースレターなど記事 83 件、ポストカード 32 件、ポスター16 件、「点音」マップ 30 件、図面 6 件、カタログ 4 件、イラストなどその他 69 件。いくつかのデータベースのサンプルをここに示す。



ゾンアンビエンテ (1996)



ヘーレン (2014)



ファイル 2000 年一式

鈴木昭男に関するアーカイブ作業はまだ完成途次であるが、現時点で、鈴木のパフォーマンス・作品展示など本人活動の記録化は全て完了しており、活動の軌跡をクロノジカルに辿れる状態になっている。アーカイブ作業によって様々な情報が洗い出された。例えば、鈴木と交差する人々・機関・組織が明確に浮かび上がってきた。すなわち鈴木の影響を支えたりサポートしたり影響を受けた人々(あるいはコミュニティ)の活動が浮き彫りとなり、従来、鈴木の影響はほぼ美学的な観点から論じられてきたところ、本資料を用いて社会的なアート(ソーシャルアートあるいはソーシャリー・エンゲイジドアート)としての鈴木作品・パフォーマンスが新たに論じられる可能性が出てくるなど、多角的な視点が提供されることが明らかとなった。

中川克志の研究は以下の通りである。20 世紀後半の日本におけるサウンドアート(あるいは音のある芸術)の概観を整理した論文が、NAKAGAWA2021 と中川 2021a である。ここで中川克志は、日本におけるサウンドアートの歴史を、音楽ではない音への意識が出現してくる歴史 と 音楽が美術として受容されていく歴史 というふたつの歴史が重複し交錯する歴史である、と提言した。前者はサウンドアートが登場して一般化していく歴史であり、後者は 70 年代以降の現代美術において音や音楽の存在が当たり前になる歴史である。後者については、80 年代以降、現代美術の関心が音や聴覚だけでなく光や動きなどを含めた諸要素に移行することで、芸術における音の問題が、全感覚に訴求するテクノロジーアートやメディアアートという枠組みの中に包摂されていく歴史である、と説明されるかもしれないという見立ても提出した。日本におけるサウンドアートの歴史を概観整理した研究はおそらくこれが初めてであり、英文で発表されたのも初めてである。

また、台湾におけるサウンドアートの歴史を整理したのが中川 2021b である。台湾では、1987 年の戒厳令解除後に様々な動向が一挙に流入し、90 年代にはノイズや実験音楽が制作されるようになり、そうしたアヴァンギャルドな音響芸術を総称する言葉として 00 年代前半に「サウンドアート」という言葉が輸入され、00 年代後半にはサウンド・インスタレーションが制作されるようになった、と整理できる。その歴史の中心に常に

いた王福瑞（ワン・フーレイ，WANG Fujui）やその他のアーティストへのインタビュー調査に基づき、台湾における「サウンドアート」という言葉の内実が欧米日とは異なりその指示範囲が広いこと、また、視覚美術よりも音響芸術に重点を置くことを指摘した。本研究は、将来的に、欧米日におけるサウンドアート（という言葉と作品）を巡る状況と比較考察することで、アジアにおける現代美術やサウンドアートを形成してきたトランスナショナルな力学や、西洋化と近代化に関わる文化的メカニズムを考察解明するための基盤となるだろう。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計9件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 中川克志	4. 巻 0
2. 論文標題 History of Sound in the Arts in Japan Between the 1960s and 1990s	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Underground Music-Making in Hong Kong and East Asia. Springer Singapore	6. 最初と最後の頁 225-239
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中川克志	4. 巻 7
2. 論文標題 台湾におけるサウンド・アート研究 試論 ワン・フーレイ(王福瑞、 WANG Fujui)の場合	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 常盤台人間文化論叢	6. 最初と最後の頁 157-181
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中川克志	4. 巻 6
2. 論文標題 サウンド・インスタレーション試論 4つの比較軸の提案 1/2	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 常盤台人間文化論叢	6. 最初と最後の頁 63-99
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中川克志	4. 巻 19
2. 論文標題 サウンド・インスタレーション試論 4つの比較軸の提案 2/2	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 尾道市立大学芸術文化学部紀要	6. 最初と最後の頁 83-91
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中川克志	4. 巻 22
2. 論文標題 サウンド・インスタレーション試論 音響芸術における歴史的かつ理論的背景	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 横浜国立大学 教育学部 紀要 II.人文科学	6. 最初と最後の頁 57-73
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中川眞	4. 巻 23
2. 論文標題 大きな力と対峙するアーツマネジメント	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 空間・社会・地理思想	6. 最初と最後の頁 207-213
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中川克志	4. 巻 5
2. 論文標題 サウンド・アートの系譜学：台湾におけるサウンド・アート研究序論その2	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 常盤台人間文化論叢	6. 最初と最後の頁 51-69
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Katsushi Nakagawa	4. 巻 21
2. 論文標題 Environmental music in the field of popular music: The case of 1980s Japan	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 横浜国立大学 教育学部 紀要 II.人文科学	6. 最初と最後の頁 32-44
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中川克志	4. 巻 7
2. 論文標題 台湾におけるサウンド・アート研究 試論 ワン・フーレイ(王福瑞、WANG Fujui)の場合	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 常盤台人間文化論叢	6. 最初と最後の頁 157-181
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計9件 (うち招待講演 2件 / うち国際学会 3件)

1. 発表者名 中川克志
2. 発表標題 「Sound/Art」展 (1984) のパースペクティヴ サウンド・アートとは何か とは何か
3. 学会等名 第71回美学会全国大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 中川眞
2. 発表標題 サウンドアート 国内&海外
3. 学会等名 CAP夏季講座
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 中川眞
2. 発表標題 平安京 幻視宇宙
3. 学会等名 ドミューン・オンライン (渋谷)
4. 発表年 2020年



1. 発表者名 中川眞
2. 発表標題 鈴木昭男のサウンドアート
3. 学会等名 和歌山県立近代美術館講座
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 中川眞
2. 発表標題 Socially Inclusive Arts Management as Social Engine in the Era of Post-colonialism
3. 学会等名 Humboldt Conference in Dong-A University (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 中川眞
2. 発表標題 Socially Engaged Arts Management and Community
3. 学会等名 The 14th International Conference of Asian Arts Management in Cambodia (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 中川克志
2. 発表標題 台湾におけるサウンド・アート研究試論 ワン・フーレイ (王福瑞、WANG Fujui) の場合
3. 学会等名 第70回美学会全国大会研究発表の代替発表
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Shin Nakagawa
2. 発表標題 Empowering Arts and Cultural Organization
3. 学会等名 The 17th Urban Research Forum in Yogyakarta (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 中川克志
2. 発表標題 1950年代から90年代における雑誌『美術手帖』(1951-2002)における 音/音楽 の諸相
3. 学会等名 共同研究「音と聴覚の文化史」(国際日本文化研究センター)
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 Katsushi Nakagawa	4. 発行年 2019年
2. 出版社 Springer	5. 総ページ数 256
3. 書名 Computational Aesthetics. SpringerBriefs in Applied Sciences and Technology	

1. 著者名 中川克志ほか	4. 発行年 2021年
2. 出版社 アルテス出版	5. 総ページ数 611
3. 書名 音と耳から考える：歴史・身体・テクノロジー	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

## 6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分担者	中川 克志  (Nakagawa Katsuhi)  (20464208)	横浜国立大学・大学院都市イノベーション研究院・准教授    (12701)	

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 協力者	奥村 一郎  (Okumura Ichiro)		

## 7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計1件

国際研究集会 音によるコミュニティアート・フォーラム	開催年 2019年～2019年
-------------------------------	--------------------

## 8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関		
インドネシア	インドネシア芸術大学ジョグジャカルタ校	ガジャマダ大学	
その他の国・地域	台南芸術大学	国立台湾芸術大学	
ベトナム	Vincom Center for Contemporary Art		
タイ	Djung Art Space	チュラロンコン大学	